

○ Space in Symbiosis

共

きょう

棲

せい

の

「確か

間

ま

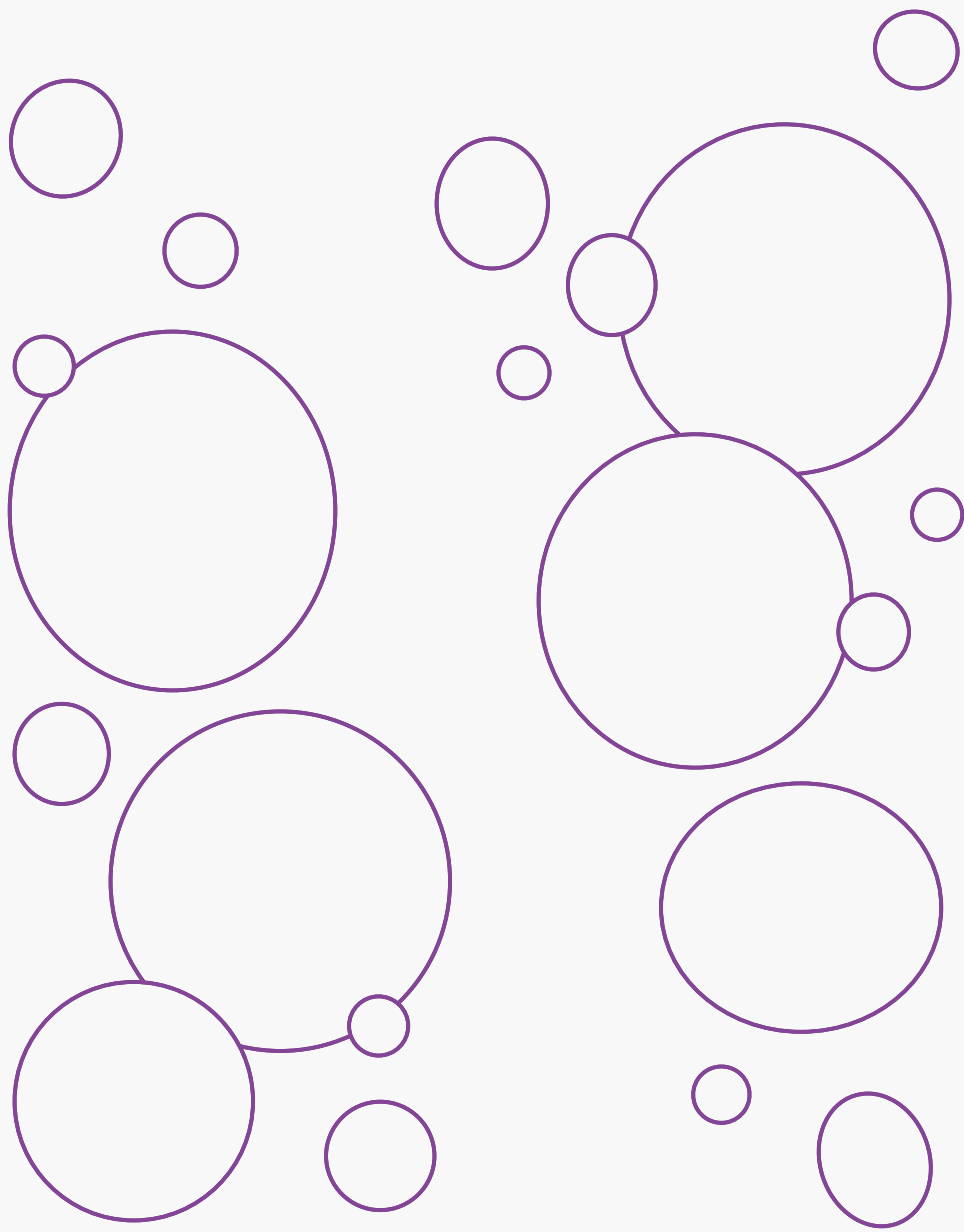
合

あ

い

「確かたの共の棲は

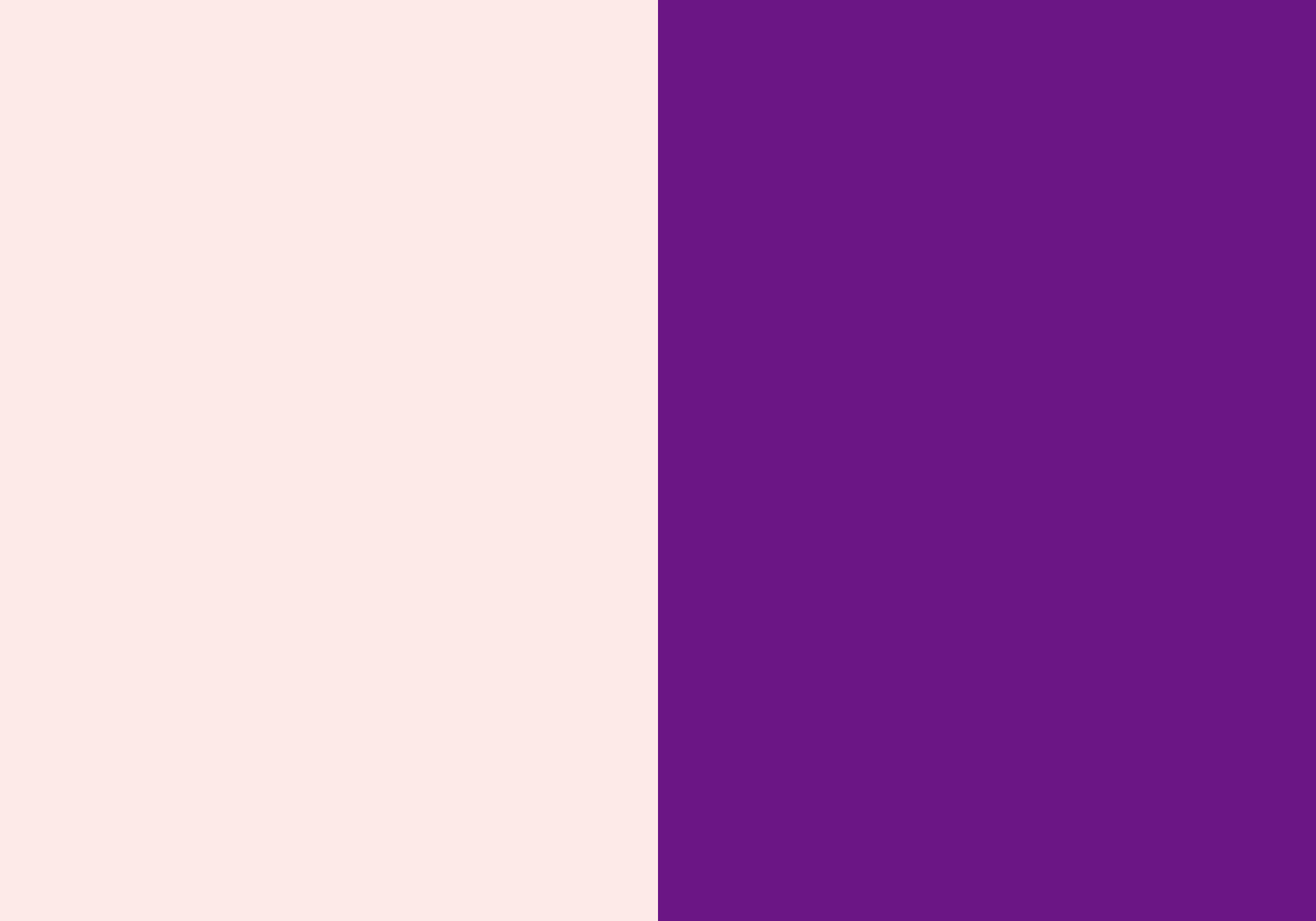
-How to live with "certainty"-



Space in Symbiosis

共きょう棲しゅうのの合あいい間ま

-How to live with "certainty"-



きょう せい ま あ
共棲の間合い

Space in Symbiosis



「確かさ」と共に生きることは

-How to live with "certainty"-

ごあいさつ

東京都渋谷公園通りギャラリーは、このたび、「共棲の間合い ―『確かさ』と共に生きるには―」を開催いたします。

本展では、住む、暮らす、生活する、共に行くことを起点に表現する作家たちの作品や活動を紹介します。身近な家族との関係性に迫るパフォーマンスを行ってきた折元立身、ある食料品に対する強い愛着を持つ酒井美穂子、近隣地域の清掃活動から詩作、絵画表現など多岐にわたる活動を続けるスウィング、現代の住居や生活様式を問い直す村上慧、表現のあり方は作家それぞれにユニークです。

それらの表現は、生活と芸術の境界を揺るがし、問いかけるものでもあります。それぞれの独自性と出会うとき、驚きや困惑を覚え、異様に感じ、または笑いや安らぎを感じるかもしれません。しかし、かれらの作品にはそれぞれにとって最も親密で、確かなものが共棲しています。かれらは言葉にしにくい個と個の間柄、大きなものに文脈化することのできない日常の間合いを大切にしているのです。ときに親密に、ときにヒリヒリと、目には見えない間合いをとって、それぞれが他者や世界と対峙しています。

本展ではそのなかに分け入り、かれらの「確かさ」に触れ、鑑賞者それぞれにとっての「確かさ」とはなにかを反芻する機会となればと思います。それぞれの共棲の間合いへと足を踏み入れてみてください。

会期中には出展作家によるパフォーマンスやワークショップ、ゲストとのトークイベント、筆談による鑑賞会など、展覧会へさらに一步踏み込むイベントを開催しますので、展覧会と合わせて是非お楽しみください。

最後になりましたが、貴重な作品をご出品くださいました出展作家の皆様、本展の実現のために貴重なご助言とご協力を賜りましたすべての皆様に、心からお礼申し上げます。

2024年2月

(公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館

東京都渋谷公園通りギャラリー

会期：2024年2月10日(土)ー5月12日(日)

会場：東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1、2、交流スペース

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

Exhibition Period: Saturday, 10 February – Sunday, 12 May 2024

Venue: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Galleries 1 and 2 and Interactive Space

Organizer: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery,

Museum of Contemporary Art Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

謝辞

本展覧会の開催にあたり、ご協力を賜りましたすべての関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。（順不同／敬称略）

折元立身
酒井美穂子
村上慧
スウィング
キノティー・F・シャルル
木ノ戸昌幸
四宮大登
柴田祥子
辻井美紗
西谷文孝
更田麻美
増田政男
向井久夫
吉村千奈
Ackey
naco
Q
XL

内田涼 戸田理恵
雲林院俊一 藤川琢史
河原絢香 元田典利
木ノ戸昌幸 山下完和

アートママ・ファウンデーション
株式会社NPO
社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房

あいサポート・アートセンター
小笠原新也
深川雅文
藤井一至
ゴミブルー
ゴミブルー
コロ・ナカムラ
櫻本ブルー
デスクロイヤーXL
ちゃみブルー

凡例

- ・ 本書は、東京都渋谷公園通りギャラリー 展覧会「共棲の間合い -『確かさ』と共に生きるには-」の出品作品を掲載している。
- ・ 編集にあたり、各作家ページに図版を掲載し、図版キャプションは各所蔵機関より提供いただいたデータを参照し、「図版番号」「作品名」「制作年」「所蔵先」の順に和英で記載した。
- ・ 作品リスト(pp. 66-70)では、「図版番号」「作家名」「作品名」「制作年」「技法・材質」「サイズ(cm)」「所蔵先」の順に和文で記載した。サイズは縦×横×奥行の順に記した。
- ・ コピーライト／写真クレジットは、巻末にまとめて掲載し、項目ごとに主にページ順に記した。

Explanatory Notes:

- ・ This catalogue contains artworks displayed in *Space in Symbiosis -How to live with "certainty"-* at the Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.
- ・ Plates are printed on each artist's page with captions that reference data provided by the collector. Captions are given in Japanese and English in order of Catalogue Number, Title, Date, and Collection.
- ・ List of works data (pp. 66-70) is given in order of Catalogue Number, Artist Name, Title, Date, Media, Size (cm), and Collection. Size is indicated by height x width x depth.
- ・ Copyrights and photo credits appear at the back of the catalogue, where they are listed for each item principally in page order.

「確かさ」と共に生きるには

河原功也（東京都渋谷公園通りギャラリー 学芸員）

展覧会タイトルにある「共棲」には、自然界における「異なるものが相互に影響し合い生きている状態」という意味があります。調和や連帯を想起させる「共生」の思想的な側面と比べると、「共棲」は「住むこと、生活すること、共に行うこと」という、より具体的で手の届く範囲の生き物同士の関係によって語ることでできる言葉のように思います。「間合い」は、生き物と生き物との空間的かつ精神的な距離を指していて、目には見えないものです。しかし、誰もが、無意識のうちに、自らのやり方で何かとの間合いをとり、適度な空間＝居場所を確保し生きています。間合いは、友好的かつ親密なだけでなく、ときに敵対的で緊張状態にある側面も含めて、常に移ろいバランスを取りながら変化し続けています。本稿では、各作家のこれまでの活動や作品、また本展で行われた展示を振り返りながら、「共棲の間合い」について考えていきたいと思います。

体験型のインスタレーション作品《熱の部屋》を本展で制作した村上慧は、これまで住むことそのものを問い直す活動を続けてきました。現代の暮らしは、生活基盤となる電気・ガス・水道といったライフラインに頼っています。しかし、多くの人はその仕組みや機能などを知らずに暮らしています。村上は、その目に見えない働き＝力を、微生物の働き＝力に置き換えて、鑑賞者が身体的に体験することのできる暖房装置を制作しました。ほのかに温かい場所、50度を超える熱い場所、ひんやりする場所など、同時多発的に、微生物それぞれの働き具合が体感できます。日常的に目にする大量の落ち葉や人の数の比にならないほど多く存在している微生物たち。普段意識されにくい存在を取り上げ、顕在化させる作品ともいえます。

《熱の部屋》においては、鑑賞者が熱を体験するために手や足を発酵槽内に入れることで、槽内の環境に変化が生じます。体験者が作品に作用し、体験者自体も熱源のひとつとなるのです。この一連の作用によって、微生物の活動を促進している場合もあれ

ば、減退させている場合もあり、ここで起こる現象には予測不可能な限界あるいは余白があります。この余白はどこまでも広がる可能性を秘めていて、村上のこれまでの作品にも通底する要素であると思われます。

村上は環境や生物に対して、人がどのように影響するのか、影響してしまうのかといった世界との関わり方に対する、繊細な距離感覚をもっています。建築を学んでいた学生時代から活動初期の作品では、人が集い食事や表現活動などを行う場を設計・建造・運営するプロジェクトや、他者同士がその場で作用し合うことで成り立つプロジェクトを展開していました。その後、代表作となるプロジェクト「移住を生活する」では、移住者である村上と移住先の地域住民との間で引き起こる協働や衝突、その社会的かつ個人的な葛藤、影響関係そのものを作品に内包してきました。公私や内外の境目をなくすような態度は、村上作品のもつ魅力のひとつと言えるでしょう。近作の自然との協働においても、決して人間には制御することのできないものを尊重し、変化を前提とした共存のあり方を模索する作家の態度が確かに存在しています。

折元立身の代表作である「パン人間」。本展では、初めて行われた1990年から2000年までの公共空間でのパフォーマンスの記録写真、1990年から2016年までのスライド記録が並びました。折元のパンで頭を覆い隠す姿は、儀式を行うシャーマンあるいは異形のもの姿を想起させます。しかし、身近な食べ物を用いることで滑稽な姿にも取ることができ、不気味さと笑いが表裏一体となっています。それは、個人を示す顔を隠し、食べ物であるパンを装身具とすることで、それぞれの意味や機能を壊すナンセンスな点からも明らかです。菌の発酵作用によって形成されるパンは、人と微生物との協働を代表する食べ物のひとつですが、折元の手にかかると、連綿と続く文脈をも断ち切り、新たな関係性を構築しようという企てを感じさせます。パン人間との出会い、その予期せぬ遭遇によるコミュニケーションの中には、造形的異質さと親しみやすさによる緊張と緩和の両方が存在しています。

もうひとつの代表作「アートママ」では、要介護の実母との協働によるパフォーマンスや日用品を用いたオブジェによって、親子の親密な間柄を作品化しています。本展で中心的に紹介したオブジェは、折元の母の使用していた薬の包装や老眼鏡、歯ブラシ、入れ歯、鏡などの実用品から、母の何気ない日々を記録し

た写真、拾った郵便受けや段ボール箱などが用いられています。それらの素材の組み合わせは、他人からすると混沌としたカオスであると同時に、親子の親密さゆえに保たれる秩序のようなものが垣間見え、鑑賞者が触れることのできない聖域のようでさえあります。しかし一方で、使い込まれた日用品特有の既視感や郷愁が鑑賞者を引きつけ、自身の記憶へと結びつける面も特徴です。自分事として作品に自己の体験を投影する人もいるかもしれませんが。折元は、介護という向き合うことの複雑な現実や日常を作品へと昇華させました。さらに、作家自身が実生活を露にすることで、介護の現実には「慈しみと怒り」の両方があるということを示しました。

パフォーマンスやオブジェにみられる折元作品のエッセンスは、1970年代に修業したニューヨークでの体験に深く関係しています。初期作品から一貫してある、変化し流れていく「時間」という、コントロールのきかないものへの関心や日常からのまなざしは、当時のニューヨークで活躍したフルクサスの精神を受け入れ体現しているといえるでしょう。自然物や日用品、打ち捨てられたもの、役に立たないもの、そういった忘れかけられているものに、新たな価値や用途を与えていく行為を折元は多くの先達から学びました。

近作《無情》は、日本人形の頭部が割り箸や麻紐でぐるぐる巻きに束縛されたもので、不自由な肉体を想起させます。自身の老いによる身体と思考の乖離や不全の感覚をドローイングのようなスピード感で仕上げた衝動的かつ感傷的なオブジェです。ほかに、麻紐で結ばれていたり頭部と体が分離した人形が、鳥かごや箱の中に閉じ込められたものもあり、破壊的な躍動感と陰鬱な静けさをあわせ持つオブジェ群が展開されています。2023年の短期間に連続して生み出されたこれらのオブジェ群には、外出や交流が制限されたコロナ禍の鬱屈とした折元自身の感情がダイレクトに抽出されていると思われます。折元の根幹には、ネガティブな状況や事柄に対していかにアクションし、ポジティブに変えていくのかといった反転の思考があります。その力は、愛とユーモアに溢れ、今なお世界に開かれ、老いゆく自身を生る舞台へと突き動かす原動力ともなっています。

折元と展示壁を一枚隔てた向こう側には、即席麺と協働する酒井美穂子の展示が広がります。酒井は一日の大半を即席麺の袋と過ごします。そこに流れる時間は永遠と刹那が混じり合い、酒井

独自の時間感覚の中にあるようです。酒井にとっては多くの人のように、即席麺＝食べ物というわけではありません。酒井と即席麺の間には、単なる認識や反応を超えた親密さを感じられます。その特別な対象との触れ合いによって、酒井独自の主観的な知覚・認識が織りなされた「世界」となっているようです。

酒井はお気に入りのソファに寝そべりながら、正座しながら、床に立ち尽くしながら、前に進んだり後ろに下がったり、人が近くにいようがいなかろうが、即席麺の袋ととても長い時間を過ごし続けてきました。時折訪れる静寂の際には、酒井が手に持っている袋の音が彼女の呼吸音や鼓動の音を思わせ、不思議な存在感と共に部屋をこだましています。

作品を創作することを仕事として、利用者とスタッフの協働も含めて運営してきたやまなみ工房としても、酒井に絵を描いたり、糸を編んだりといった創作活動を促そうとしたこともあったそうです。しかし酒井は頑なに、即席麺の袋を手離さなかったといいます。ある日、やまなみ工房の見学者の一人から、「酒井さんのインスタントラーメンの袋を保管するのはどうだろう」というアイデアを提案されたのをきっかけとして、袋を保管することになったといいます。それ以来、スタッフの思いや葛藤、気づきを経て、膨大な量の即席麺の袋が保管されてきたのです。やまなみ工房は、絵や陶芸を中心に創作活動が盛んな、国内外でも注目を集めている福祉施設の一つです。そのクリエイティブ集団の中でも、酒井はひと際存在感を放っています。それは、彼女の行為そのものだけでなく、酒井と即席麺との言葉のない、境界を超えたコミュニケーション、そしてその行為をサポートする家族や施設スタッフとの協働関係があるからです。形にならない行為を形に残そうとしてきたスタッフや家族、酒井の行為や集積を紹介してきた美術館やギャラリー、美術関係者の様々な視点と挑戦が交差する場に、日本のアール・ブリュットのひとつのあり方があるといえるでしょう。福祉施設の中の支援する側とされる側という垣根を取り払った、お互いを尊重する関係性のあり方が、一朝一夕では成立しない信頼関係を築き、またそのなかで生まれる協働が顕在化し、酒井の行為は作品としてみる人の心に直接働きかけてくるのです。酒井の行為は、商品や食べ物を美術館やギャラリーという展示空間に堂々と展示することを可能にし、芸術と日常とが向き合う接点をつくり上げました。

スウィングはギリギリアウトを狙う独特なユーモアのセンス、

「働くこと」の捉え方、外部への自主的な発信が特徴的です。その根底には、施設名の「スウィング＝ブランコ、揺れる」に込められた思いがあります。前に進むことと後ろに戻ることに、個人や組織のあらゆる変化をいかに受け入れながら生きていくのか、という問いかけに挑む姿勢があるのです。

スウィングのメンバーによって描かれた絵は、少し毒々しく反抗的でありながらも、親しみや笑いを感じることのできる作品が多くあります。描かれた対象である動物や食べ物が単色の背景から浮き立つようなコントラストが特徴的なAckeyとnaco、色の組み合わせや構図の大胆さが特徴的なXLと柴田祥子の絵は、人や動物、ロックスターが描かれ、古代と未来が混在したアンビバレントな世界観を感じさせます。かれらに共通して、オイルパステルや油性のキラキラペンといった画材の選択や塗りこみの強弱には、描き手の個性や好みがダイレクトにあらわれ、それぞれが絵に向き合っていた時間が蘇るかのような生々しさがあります。メンバーによる詩作は、日常の些細な出来事を短い言葉で端的に表現している点の特徴で、思わず笑えるものから一瞬で心の奥まで浸透するものまで、多数ある中から56編を紹介しました。日記のように書く人もいれば、ワークショップや話し合いの中から言葉を紡ぐ人もいて様々な書き方があるそうです。中でも向井久夫の詩には、愛する人や物、出来事に対して無垢と経験の両立した穏やかな語りがあり、まるで読み手を丸裸にしてしまうような力があります。

清掃活動「ゴミコロリ」の歴代の記録写真を見ていくと、メンバーそれぞれの変化だけでなく、町の風景も拾ったゴミの数々も、それぞれに変化していることに気がつきます。それは変わらぬ活動を定点観測的に続けてきたことで発見できる確かな変化でしょう。ゴミコロリは、アイテムを集めながらダンジョンを進むRPGの世界を思い出させます。日常にちょっとしたゲーム性を持ち込むことで、人があまりやりたがらないことも、ちょっと素敵に面白く、達成感のある事象に変換させることができるのかもしれない。また、ゴミコロリは、慣れた人同士、知らない人同士、それぞれにそれほど言葉がいらぬのも特徴的です。そこには、見て感じて学ぶコミュニケーションがあり、決まった正解はないので、手当たり次第にアイテム（ゴミ）を集める人もいれば、自分だけの貴重なアイテム（ゴミ）を自分のペースで集める人もいます。大目的を率先しすぎないことで、その過程で起きる小さな事象の一つ一つに意味が帯びていくのが感じられます。そ

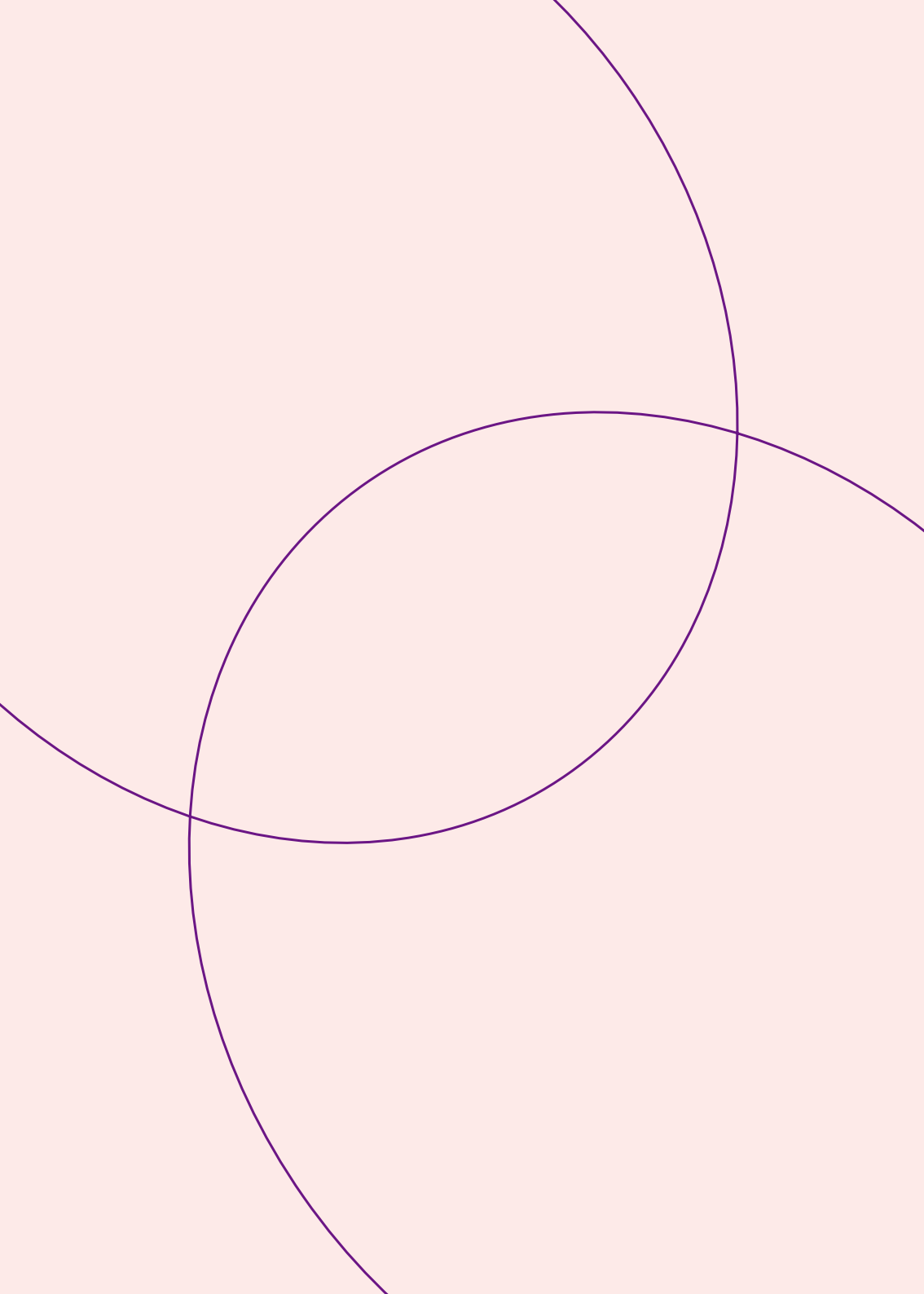
して同時に、その小さな積み重ねが強敵と対峙したときに役立つということも忘れてはなりません。

このようにスウィングには、人や社会に働きかけることを「働き」とする理念のもと、社会に飛び出て人と積極的に関わる活動があります。これらは既存の仕事観や芸術観に対するスウィングなりの問いかけであるといえます。ここでいう「人」とはメンバー自身のことも指していて、「自分自身に働きかけること」を上記の活動に見出しているようにもみえます。スウィングの織りなす活動は、大喜利的な笑いやジャズのような即興性、間口の広い親近感によって、固定された大きな答えを追うよりも、小さな問答を繰り返して、日々磨き上げられる創造的実践の在りようを感じさせます。

本展では、目に見えないコミュニケーションや働き、言葉ににくい個と個の間柄から生じる活動や作品、作家のユニークな発想を紹介しました。変化や不確かさ、不可思議さを受け入れる姿勢を各作家の態度から見出したのではないのでしょうか。街に飛び出していく姿や即席麺を持ち続ける姿からは、スケールのわからないものへと立ち向かう勇気やぶれない精神性が感じられます。

「確か」と聞くと、動くことのない固定されたものを想像するかもしれません。しかしそうではなく、柔軟で、風通しがよく、流動的で、ときに不安定な状況において、それでも流されずに残るものこそ、確かなものだと言えるのではないのでしょうか。

人（だけでなくあらゆる生き物）は、他者と間合いを取りながら共棲して暮らしています。それは、他者との関係、また自分自身も不確かに移ろいゆくものであるために、常に間合いをはかる必要があるからです。各作家の作品やかれらが長く続けてきた行為から気づくことは、不確かです。予測不可能な凹凸と実践のなかに確かなものが立ちあられるということです。



Tatsumi Orimoto

折原千鶴

津島餅

Tatsunmi Orimoto



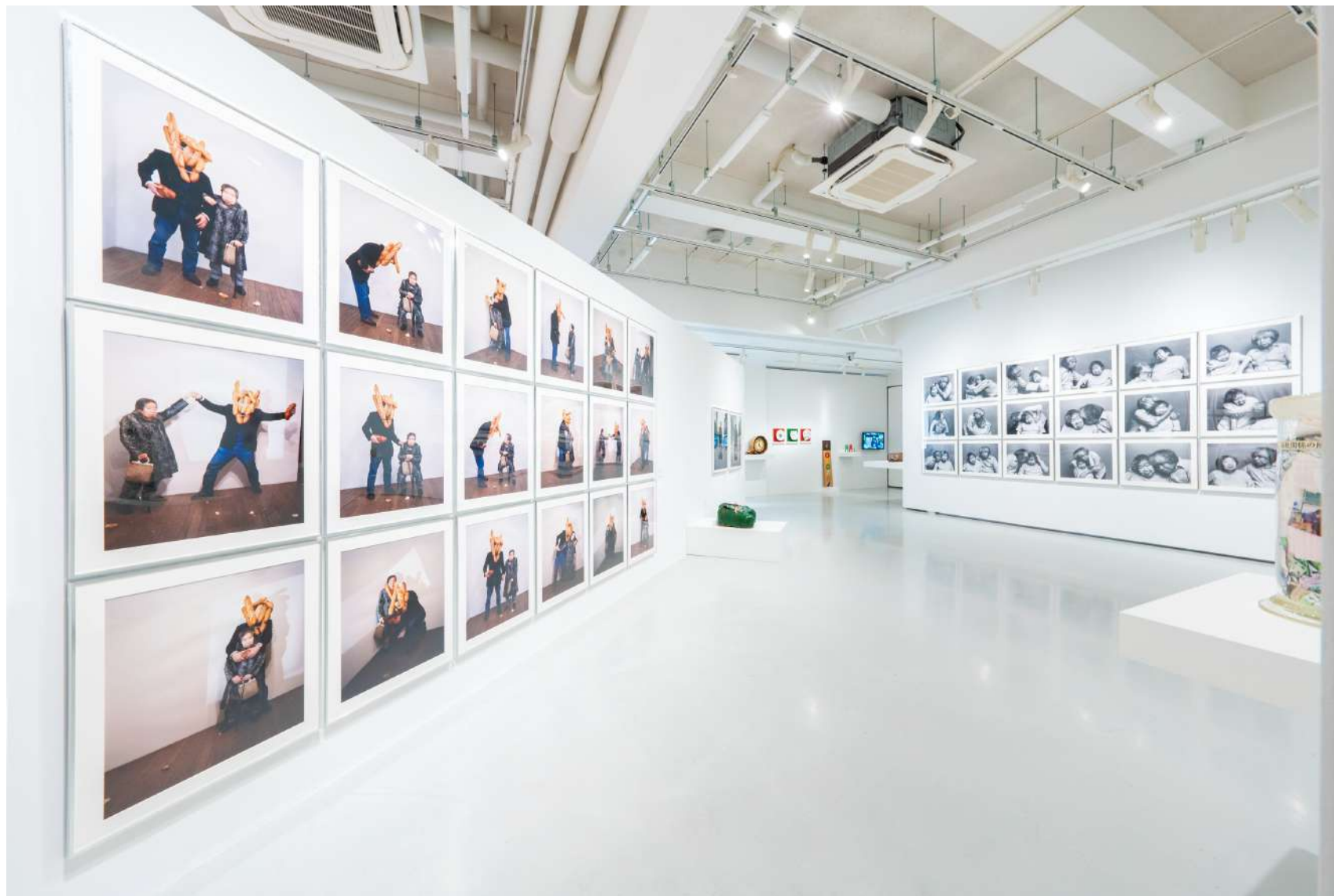
折元立身

ORIMOTO Tatsumi

1946年、神奈川県川崎市生まれ。現代美術の前線で40年近く活躍する現代美術家。

折元の代表作である、パンを頭に巻きつけ街中に繰り出すパフォーマンス「パン人間」は、世界各地の美術館やギャラリー、路上などで延べ200回以上行われてきました。その度に驚きと戸惑い、あるいは笑いを伴うさまざまな反響と交流を生んできました。また「アート・ママ」では、折元が母親（折元男代）を介護する日々、その暮らしぶりや親密な間柄をパフォーマンスによって表現し、写真や映像、オブジェを用いて形に残すことで、大きな注目を集めました。本展ではそれらの代表作の一部を展示します。このように折元は、人と人（ときに人とほかの動物）の間柄やコミュニケーションのあり方について愛とユーモア、慈しみを持ち、作品を通して向き合ってきました。折元自身は自作に対して意味づけすることを避け、衝動的に生まれたものだと述べています。しかし、折元作品のもつ既視感と逸脱の妙は、生活と芸術の境界を、そして日常に潜む目には見えない境界線や目を背けてしまうような現実を揺さぶり、見る者の中に強く残り続けます。

本展で発表する最新作のオブジェ作品は、折元の自宅兼アトリエの部屋に点在する無数の素材や日用品を組み合わせ、制作されました。パフォーマンスで発せられるような即興的エネルギーと共に、一見役に立たないものや忘れられていくものに再び命を吹き込んでいます。それらのオブジェは、生活と地続きの制作を行ってきた折元の長い美術家人生が、生々しく投影されているかのようです。





1 2



5



4



3



6

1.
アートママ (小さな母と大きな靴)
1997年 作家蔵
Art Mama (Small Mama + Big Shoes)
1997 Collection of the artist

2.
アートママ (小さな母と大きな靴)
1997年 作家蔵
Art Mama (Small Mama + Big Shoes)
1997 Collection of the artist

3.
アートママ オブジェ:ビッグシューズ
1997年 作家蔵
Art Mama Object: Big Shoes
1997 Collection of the artist

4.
郵便受け箱とアートママ
2000年 作家蔵
Letter Box and Art Mama
2000 Collection of the artist

5.
ポロポロのダンボールボックスと
母の生活の声
1999年 作家蔵
*Carton Box in Tatters and
Mama's Live Voice*
1999 Collection of the artist

6.
アートママ オブジェ:1999年の
母の医療と社会福祉
1999年 作家蔵
*Art Mama Object: Art Mama's
Medical Care and Social Welfare
Service in 1999*
1999 Collection of the artist



20

新元立身
ORIMOTO Tatsumi
無情 II
Heartlessness II
2023年 / 2023
アクリル、紙、糸、糊、木、布、墨
Acrylic, paper, string, glue, wood, fabric, ink

19

新元立身
ORIMOTO Tatsumi
無情
Heartlessness
2023年 / 2023
アクリル、紙、糸、糊、木、布、墨
Acrylic, paper, string, glue, wood, fabric, ink

21

新元立身
ORIMOTO Tatsumi
行進
March
2023年 / 2023
アクリル、紙、糸、糊、木、布、墨
Acrylic, paper, string, glue, wood, fabric, ink



酒井美穂
Mihoko Sakai



酒井美穂子
Mihoko Sakai



酒井美穂子

SAKAI Mihoko

1979年、滋賀県生まれ。1996年より滋賀県にある福祉施設「やまなみ工房」に所属。酒井は28年以上、どこであってもだれと居ようとも、即席麺「サッポロ一番しょうゆ味」を片時も手放しません。それを食べるわけでもなく、ただ黙々と握り、一定のリズムで「カサッカサッ」というビニールの擦れる音を聞きながら、微かな反射を静かに眺めています。

即席麺の袋は毎朝、酒井がやまなみ工房に出勤する際に、家族が新しい袋を手渡しています。前日の分は、施設職員が預かり、日付を記した付箋を袋に貼って、ひとつひとつ保管されています。一見同じように見える袋でも、見比べてみるとそれぞれに異なる形状であることがわかります。それは言葉を発することの少ない酒井の日々の記録であると共に、酒井と施設職員とのかけがえのない記憶を蘇らせるメディアとなっているのです。

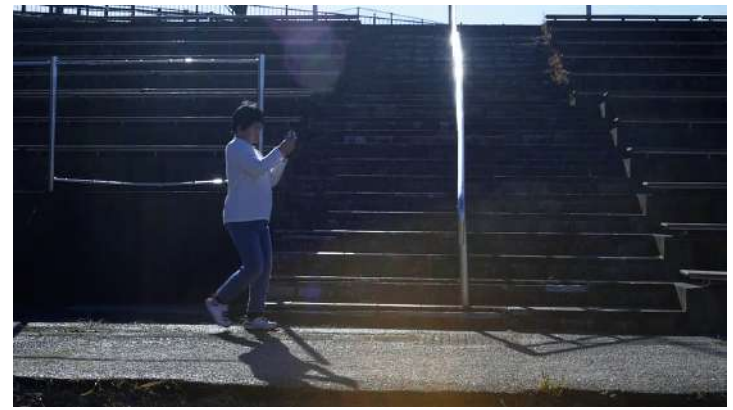
本展では、千個を超える即席麺の袋を壁一面に展示します。形にならない些細な行為を無為のまま残そうとした膨大な蓄積の一部をご覧ください。加えて、酒井が即席麺を握る日々の様子や施設職員へのインタビューの映像を上映します。酒井の握る即席麺は今なお増え続けています。





酒井美穂子
SAKAI Mihoko









スウィング

Swing

スウィングは2006年より京都にて活動を開始した、障害のある人ない人およそ30名が働く福祉施設。

表現活動を基軸とした運営を行い、自主的な発信は展覧会の実施やフリーペーパーの出版、ラジオ配信など多岐にわたります。本展では、スウィングのその主な活動から絵と詩、ゴミコロリを紹介します。

会場中央には、スウィングのメンバーが書いた数々の詩作を集め、本展特製の巨大な詩集として展示します。大きなページをめくりながら、メンバーの日々の出来事や記憶がちりばめられた詩の世界に、想像を巡らせてみてください。

スウィングの活動や制作環境は、個々の創作を尊重しながら、スタッフとメンバーの協働関係を大切にしています。ルールに縛られることなく、それぞれのメンバーと対峙することで、日ごろから流動的な応答を続けています。壁一面に並ぶ絵の数々からは、風通しの良い環境から生まれた自由な色使いや形、構図、描きぶりが感じられるでしょう。

また、毎朝の朝礼では、各々が日常の何気ないこと（昨日食べたもの、奥歯を抜いたこと、健康診断に行きたくないなど）を話す時間があり、かしこまらずに伝えあうことのできる場があります。シンプルなキャッチボールから、捕えきれないほどの魔球まで、どうにかキャッチしてくれそうな安心感は、これまでの創造的実践による鍛錬の賜物かもしれません。大きく「ゆるる」ための土台は、目には見えない地中深くに根ざしています。



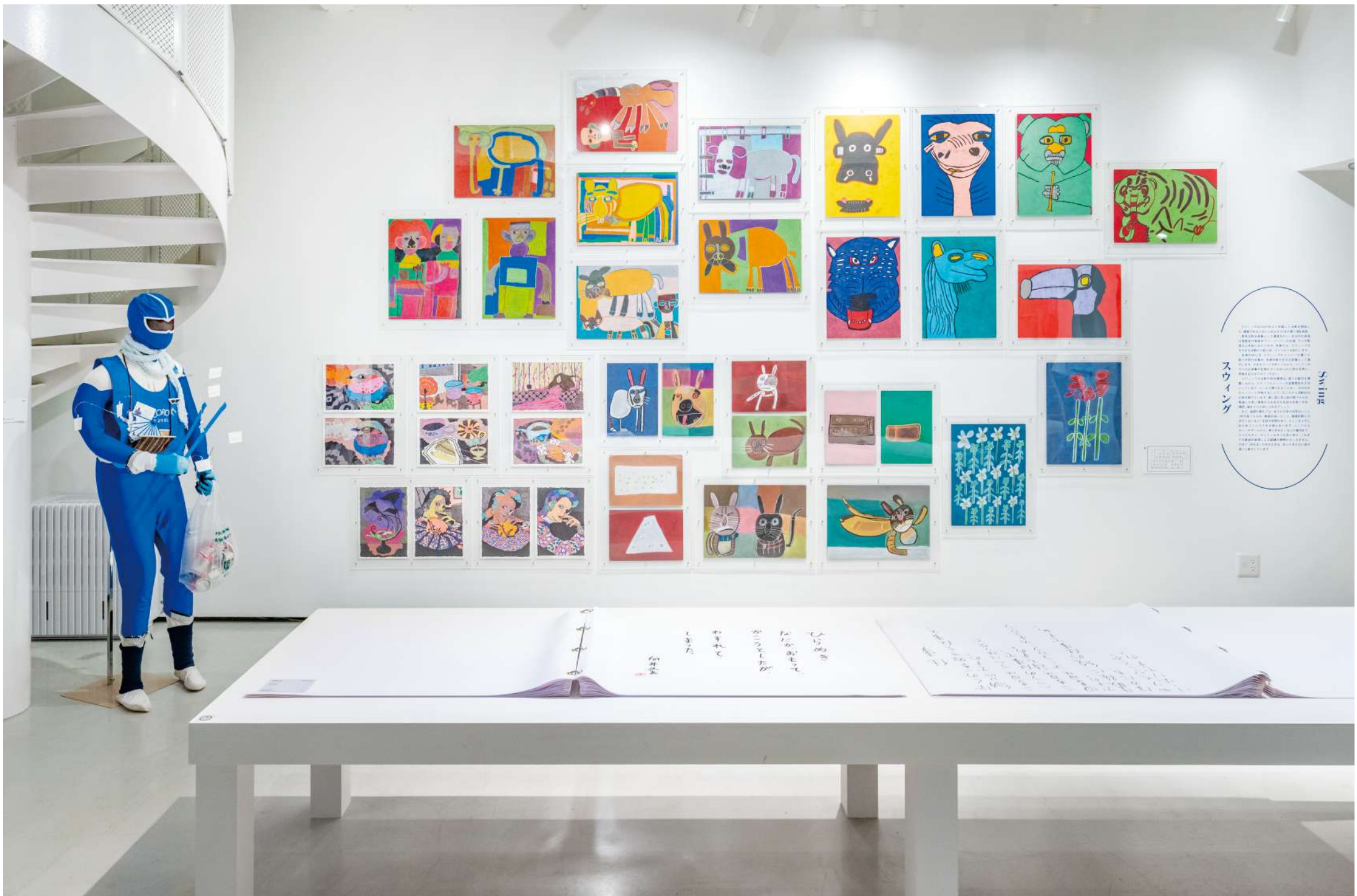


ゴミコロリ GOMICORORI

ゴミコロリは、スウィングが2008年より15年にわたって月1回ペースで実施している清掃活動です。

スウィングが位置する京都・上賀茂地域を中心に、暑い日も寒い日も欠かさずに行われ、今年の2月で184回を迎えました。日常風景に「バグ」を増やすことをテーマとしながら、既存の仕事観や芸術観にとらわれない、スウィングの中心的な活動の一つとして続いています。本展では第1回目からの過去の記録写真と、京都と渋谷で実施した際の記録映像を展示します。

青いコスチュームを着たヒーロー「まち美化戦隊ゴミコロレンジャー」（通称、ゴミブルー）は、ゴミコロリの広報部隊として第50回目から登場しました。登場したばかりの頃は、象徴的な「バグ」の役割を担い、日常風景からしっかりと浮いていたといいます。しかし現在では、近くの幼稚園や小学校の子どもたちから歓声を浴びたり、すれ違う人たちに挨拶されたり、近くのコンビニで買い物したりと、「バグ」でありながらも日常風景の一つとして溶け込みつつあります。この活動を通して、楽しむことを忘れず、見返りや対価よりも「日常の延長線上にある小さな喜び」を感じることに重きを置いているといいます。目的ではなくその過程で起こるコミュニケーションにスポットが当てられ、日常の街中で起こる大小さまざまな境界をユニークに揺さぶっています。



スウィング
Swing

この展示は、2019年10月に開催された「スウィング」展の展示風景です。展示は、アーティストの作品を展示するためのスペースとして設計されています。展示の中心には、アーティストの作品が展示されています。展示の周りには、アーティストの作品に関する情報が提供されています。展示のデザインは、アーティストの作品と調和するように設計されています。展示の雰囲気は、アーティストの作品を鑑賞するためのスペースとして設計されています。展示のデザインは、アーティストの作品と調和するように設計されています。展示の雰囲気は、アーティストの作品を鑑賞するためのスペースとして設計されています。



40. 無題 2016年 スウィング蔵
Untitled 2016 Swing



森下 聡
Satoshi Murrakami



Satoshi Murrakami



村上慧

MURAKAMI Satoshi

1988年、東京都生まれ。既存の住居や生活様式を問い直してきた現代美術家。

村上は2014年より、自作の発泡スチロール製の家を持ち運びながら国内外で移動生活を行うプロジェクト「移住を生活する」を行い、大きな注目を集めました。「住むことのパターン」を展開している村上は近年、「村上勉強堂」という新たなプロジェクトを開始し、落ち葉の発酵熱や酸化熱の冷房効果を利用するなど、電気を使わない冷暖房空間の開発に取りくんでいます。

本展では、村上が会期前に滞在制作した体験型の作品を展示しています。それは落ち葉に付着した微生物が有機物を分解する際に出る熱を活用した新作インスタレーションです。

落ち葉は、ギャラリーの北側に位置する代々木公園の落ち葉（約4,500㍓分）が使用されています。落ち葉や腐葉土の匂い、自然の動きによって起こる「熱」を体感してみてください。そのなかには人間の目には見えない、無数の微生物の働きがあります。村上は鑑賞者も熱源の一つとして、微生物の働きに何かしらの作用を及ぼすことを期待しています。

人間の体内をはじめ、世界中のあらゆる場所で知らずうちに起きていることに思いを巡らせてみると、人間の暮らしを下支えしている人工的な環境が、自然環境から孤立していることへのねじれを感じるかもしれません。村上は実際的なアクション、住むことの手触りを通して、当たり前すぎて気がつきにくいものを顕在化しようと試みているのです。





ここに落ち葉は代々公園で集められたり、
 アスファルトの上ではゴミとして処分されていますが、
 落ち葉は人間の命にとって不可欠の土
 の原料であり、^(土) たちにとっても必要です。
^(葉) の表面にはいろいろな菌がたくわえられていて、
 落ち葉をまきこむと分解し、自分たちの栄養になります。
 このとき、人間の呼吸によって^(熱) が生まれます。
 この部屋にある大きな箱は、その分解を助ける
 ことで、大きな^(熱) をつくることのできる装置です。
 (ここでは、2000リットル(400リットル)の生ぬる水を90℃に加熱し、
 それを水を加えて200リットルほどまで増やして)

落ち葉にはさまざまな菌が住んでいて、
 プランクトンというものが書かれた本は、
 ひどりの人間の腸には100兆個の微生物
 が存在し、海のサンゴ礁もまた生態系を
 つくっているそうです。おたまたま生まれる菌から
 和食まで、アフリカ五頭山の果てに広がる
 微生物の宿主はさまざまあり、^(土) の
 人口を上回る数の微生物が住んでいる。
 生き物は、熱をつくりだすことで呼吸を続け、
 おなごで生きていくためにこの部屋にいるわけですね。
 の菌たちは菌がたまり、^(熱) がたまり、^(熱) がたまり

These fallen leaves were gathered from Tokyo Park
 in the city, where the ground is covered by asphalt,
 they are treated as trash. However, fallen leaves
 are an ingredient of soil, which is essential to
 us humans. They are also food for countless microorganisms.
 A great number of microorganisms can be found on
 the surface of each leaf. They gradually decompose
 the fallen leaves and turn them into nutrients.
 As they do so, their respiration generates heat. As they
 live, this room is a device that can produce large
 amounts of heat by using this microbial decomposition.
 (About 90 kg of wet biomass and 200 liters of water were heated
 added to 200 liters of water.)

Microorganisms also live inside your body.
 According to the book by Alanna Collier, a single human
 intestine is home to 100 trillion microbes, which form
 an ecosystem like an oceanic coral reef. From the
 day we are born until the day we die, we are the
 "hosts" to microbes whose total weight is equivalent
 to that of five African elephants, and your fingertips
 alone are the home to a larger number of microbes than
 the entire population of the United Kingdom.
 As living beings, we continually generate the heat we need
 to stay alive. It's the same for microbes. While you're in this
 room, your body's microbes are stimulating the other micro-
 organisms, while also aiding or interfering with the microbial decomposition.





ウォーミングアップイベント

46-49頁

Warming-up Event

pp.46-49

本企画では、「共棲の間合い」展をより深く楽しむためのウォーミングアップとして、出展作家3名1組によるプレイベントを行いました。会場では、作家ごとに、折元立身による自宅トイレに設置されたインスタレーション作品の再現、村上慧による微生物の発酵熱を活用した作品の滞在制作、酒井美穂子の所属するやまなみ工房の日常を切り取ったドキュメンタリー映画の上映、スウィングによる渋谷の街で実施する清掃活動やラジオ収録といったイベントを行い、展覧会とは違った角度から作家たちの活動や表現をご紹介しました。

それぞれに共通するのは、ゴミ拾いから微生物の働きまで、人知れず行われている目には見えにくい「循環」と「つながり」のあり方が感じられる点でしょう。出展作家それぞれの表現行為、その根源に触れる機会になりました。

関連イベント

50-65頁

Event

pp.50-65



2024年1月13日(土)～28日(日)
13:00-18:00
休館日：月曜日

《ボッシュ・トイレ・ミュージアム》は、折元立身の自宅トイレ内に設置されたインスタレーション作品です。トイレ室内には、ヒエロニムス・ボッシュ（ボス）の有名な三連祭壇画《快樂の園》が拡大コピーされてコラージュされています。生活空間に芸術作品が介入する様子は、生活と芸術の境界を揺るがし続ける折元の制作態度を端的にあらわしているともいえるでしょう。会場では、自宅トイレ室内の再現展示と合わせて、鑑賞者が中に入ってポートレート写真を撮り、その写真を会場の壁面に貼りつけていく体験型の展示を展開しました。



2024年1月13日(土)～28日(日)
13:00-18:00
休館日：月曜日

村上慧は、落ち葉に付着した微生物が有機物を分解するときに出る「熱」を活用した作品を滞在しながら制作しました。微生物たちの活動を活発にするため、発酵槽内の落ち葉には米ぬかを混ぜています。それらをミルフィーユ状に段々と重ね合わせて、空気の層をつくり、さらに水を加え湿度を保つことで、小さなビオトープのようになっています。微生物たちの発する熱の最高温度は58.9度まで上がり、会期中も度々「切り返し」という全体をかき混ぜる作業を行って環境を整え続けました。





2024年1月20日(土) 14:00-16:30

2018年に制作され各地の映画館や文化施設で上映されてきた、やまなみ工場のドキュメンタリー映画「地蔵とリビドー」を上映。映画ではやまなみ工場の制作現場やつくり手たちのこだわり、堂々とした魅力が存分に映し出されていました。上映後には、やまなみ工場施設長の山下完和さんとのアフタートークを実施しました。山下さんからは、やまなみ工場の環境や人と人との関係性について、「その人の大切さと同じくらい、その人の環境を救うことも大事にするべきだと思っている」というお話があり、日ごろから一人一人にとっての居心地の良さを模索し、それぞれが活躍できる場をどのように実現するかを考え続けていることが伺えました。



2024年2月3日(土)
午前の部：10:00-12:00
(ゴミコロリ)
午後の部：14:00-15:00
(Swing鼻クソRADIO)

渋谷の街で出張「ゴミコロリ」を実施しました。街行く人たちと交流しながら、参加者とともに道端に落ちているゴミを拾いました。ゴミブルーは、公園の子どもたちや野球チームの少年少女たちからも歓声を浴びて、その人気は健在。「ゴミコロリ」でひと汗流した後は、スウィングが定期的に配信している「Swing鼻クソRADIO」の収録を行い、渋谷でのゴミコロリを振り返りました。「ゴミは捨てるものではなく隠すもの」という言葉の通り、一見するとゴミひとつない通りにも、草むらの中に隠された大小のゴミを見つけました。参加者もまるで宝探しのようにはゴミを見つけて、身近な風景に対する目の解像度が上がったようでした。

「パン人間」パフォーマンス
折元立身による

関連イベント①



2024年2月10日(土)
14:00-15:00

2019年のイギリスでの実演以来、約5年ぶりとなるパフォーマンス。日本のみならず世界各地での実演を続けてきた折元ですが、東京での実施は2000年の原美術館での個展以来となりました。冒頭には、100名以上の観客と10人のパン人間たちに見守られながら、折元はパンを顔に巻き付けはじめ、パン人間

に変わっていく姿も披露しました。折元はパフォーマンス中にも不思議そうに距離をとる子どもや道行く外国人観光客にもすかさず声をかけ、一緒に写真を撮るなど突飛なコミュニケーションを繰り返しました。ただならぬ雰囲気のパン人間を中心とした、奇妙な磁場が公園通りの日常をつかの間の劇場に変換させました。

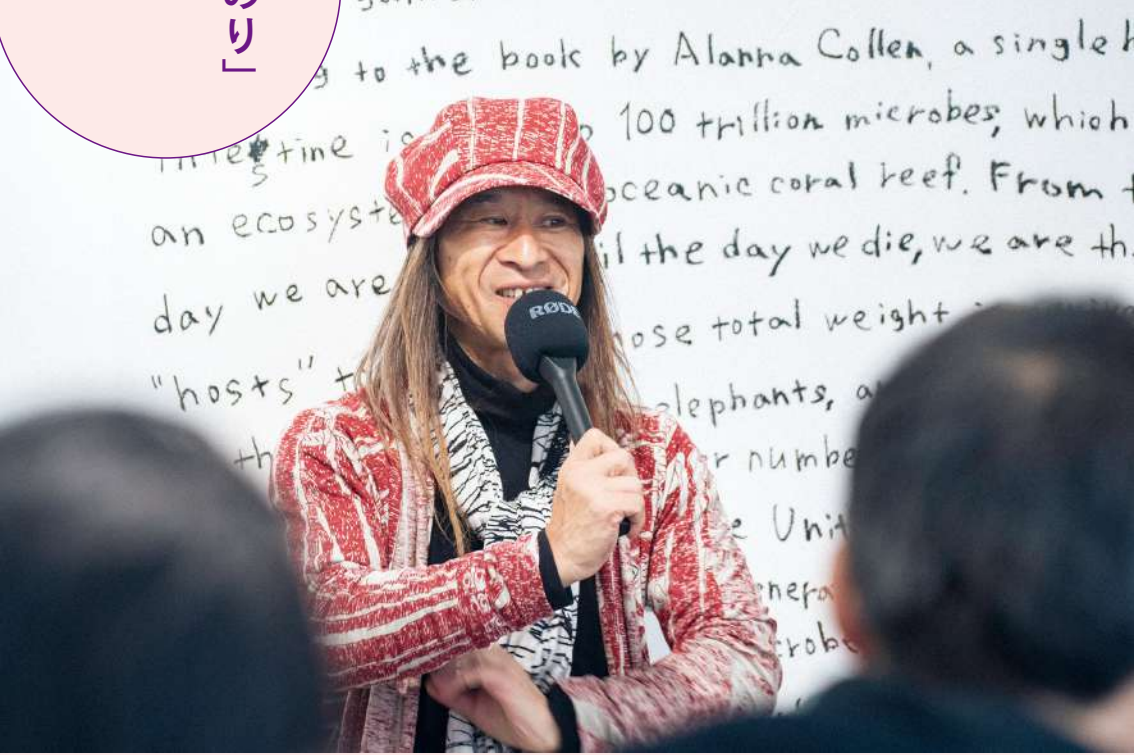


「山あり谷あり、それぞれの道のり」
(手話通訳付き)
トークイベント

2024年3月2日(土)
14:00-15:30

スウィング代表の木ノ戸昌幸さんとやまなみ工房施設長の山下完和さんによる対談を行いました。木ノ戸さんはやまなみ工房を訪れた際に、「利用者の方が創作をするために、いかに楽しく、あるいは集中して打ち込めるかという環境づくりが徹底されていることに感動というか興奮した」と振り返り、山下さんは「スウィングにいるそれぞれ

が対等で気持ちよく一緒に過ごしている。誰もが活躍する場所を大切にしている居心地の良さを感じましたね」と話していました。両施設とも、「こうすべき」という固定観念ではなく「この人はどう思っているのだろうか?」と個人個人に向き合い、日々の環境を整え続けてきたことで風通しのある居心地の良い場を目指してきたことがわかりました。

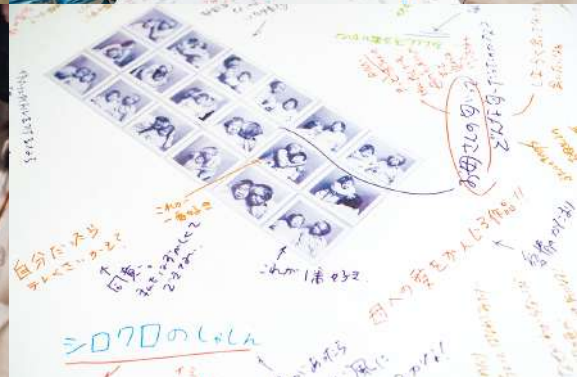
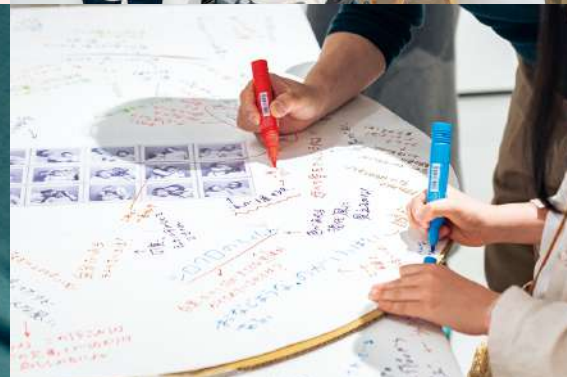


筆談鑑賞会
(手話通訳付き)

2024年3月30日(土)
14:00-16:00

耳の聞こえない鑑賞案内人の小笠原新也さんによる筆談鑑賞会を行いました。一つ目は、酒井美穂子の鑑賞用に用意した即席麺を触りながらの鑑賞。二つ目は、折元立身の母とのフォト・イベントの記録写真、最後に村上慧の体験型作品という流れで行いました。筆談鑑賞会では、作品を体験して、感じたことや気づいたことを言葉に置き換えて

いきます。そして、誰かが書いた言葉に対しても、コメントすることができます。紙に文字を書き残していくので、会話や思考がすぐには流れていかず、誰かがそれとなく気づいてくれる状況が生まれます。気軽なコミュニケーションやいたずらのような遊びの感覚も相まって、発言しやすい自由な雰囲気の独特な鑑賞の間合いが生まれました。



トークイベント
「土という場所」
(手話通訳付き)

2024年4月4日(木)
16:00-17:30

土の研究者である藤井一至さんと村上慧による対談を行いました。目に見えない微生物を「かれら」や「あいつら」と、親しい友人かのように呼び合いながら、落ち葉や微生物、土の話を展開。「生き物が生き物じゃないものを変える。生き物じゃないものが生き物を変える。お互いが相互に関わり合うのが土です。私たちは私たちだけで生きているつもりだけど、わけのわからないものとのすべての相互作用を断ち切って生きていけないほど、独立できていない」

「わたしたちはわたしたちじゃないものと変化させ合って生きている。そこが土のおもしろいところであり、めんどくさいところでもある」と藤井さんは土について、その中で起きている出来事や関係性に焦点を当てて語ります。土の中には1万種類ほどの微生物がいて、均質ではない環境だからこそ、それぞれの棲みやすい場所があり多様性があるそうです。そして、多様な微生物が棲んでいられるのは、競争や共生をひっくり返して共存する絶妙な距離感があるからではないかとのことでした。



スウィングメンバーによる

似顔絵ワークショップ

Qの型破り似顔絵「アナタのその顔、メカにします。」
XLの超デフォルメ似顔絵「もしもアナタがプリミティブだったら。。。」

関連イベント⑤



2024年4月6日(土)
14:00-16:00

スウィングのメンバーであるQさんとXLさんによる似顔絵WSを行いました。Qさんは参加者に質問（「好きな色」「好きな動物」「好きな武器」「好きなスイーツ」「好きなイニシャル」など）を投げかけながら、その回答を即座に絵に起こし、合体させていきます。XLさんは参加者を穏やかな眼力で覗

き込むようにしっかりと見つめながら黙々と描いていました。完成した似顔絵は、参加者の表情や雰囲気を捉えているだけでなく、その場の和やかな空気感も込められているような、人間味のある仕上がりとなりました。スペシャルゲストとして、ゴミブルーの一人である、ちゃみブルーさんも応援に駆けつけ、来館者と交流し場を盛り上げてくれました。

土風呂に入ってみてみたい!!

2024年4月14日(日)
13:00-18:00

村上慧《熱の部屋》の「足湯」を1日限定で「お風呂」にしました。会期後半ということもあり、発酵槽内の温度は人間の体温の前後くらいでしたが、ほんのり温かいところとひんやり気持ちいいところがまばらにあり、不思議と居心地のいいお風呂体験となりました。目を閉じて無心になると、大地と一体化したかのような壮大な景色が思い浮かび

ます。と同時に、落ち葉を分解する微生物たちの微かな呼吸の揺らぎを感じるミクロな世界ともつながる感覚がありました。参加した人たちも渋谷の雑踏を忘れ、ひと時の安息を手に入れたかのような様子



2024年5月12日(日)
14:00-15:30

インディペンデント・キュレーターの深川雅文さんと本展担当学芸員による対談を行いました。深川さんはこれまで、折元立身の大規模個展の企画やパフォーマンス実施等に関わってきました。展覧会初日に実施された「パン人間」に触れながら、パフォーマンスの場で起こるコミュニケーションのあり方や観客の反応は変わらず新鮮さがある一方で、スマホでの撮影やSNSなどでの拡散によって、インターネット上でもパン人間が実演されているようだったのが印象的だったと振り返りました。また、折元立身のパフォー

マンス作品が多くの人を引きつける要因の一つに、その造形性の高さを挙げていました。その流れで、折元の活動初期に制作されたオブジェ《皿時計》の重要性に改めて気がついたそうです。それは、いろいろなものを組み合わせ配置し直すアッサンブラージュの手法を扱っています。その後生み出される作品の素材にも捨てられたものや忘れられたものが用いられます。そして、ものを組み合わせるだけでなく、自身の身体にもアッサンブルすることも特徴的です。折元は、たとえ異なる文脈のものであっても、どこかでつながっているかのような親密な距離感を表現してきたのです。



「折元立身の生きるアートとは？」

トークイベント
(手話通訳付き)

関連イベント⑦

「パン人間」パフォーマンス
折元立身による

2024年5月12日(日)
16:00-17:00

展覧会の最後を締めくくるパフォーマンスとして、「パン人間」が再び登場しました。今回は、パン人間になる人を公募し、選ばれた9名と共にパフォーマンスを行いました。街頭に立ち並ぶパン人間たちの前に広告宣伝車が停まったとき、偶然鳴り始めたダンスミュージックに合わせてパン人間たちが踊り出すという渋谷ならではの一幕もありま

した。「I'm Bread Man. Not human being. 私はパン人間であり、人間様ではありません」という言葉が意味することとは何なのでしょう。パンでも、人間でもない存在。そのような「間」にいる存在、はっきりと言い切れないものは今も昔も変わらず存在します。そして、これからもかれらに遭遇し、驚き、笑い、ときに怖がり泣いたりしながら、共棲し続けていきたいと思う締めくくりとなりました。



展示作品リスト

折元立身 ORIMOTO Tatsumi

1. アートママ (小さな母と大きな靴)
1997年 | 写真 | 74.5×60 | 作家蔵
2. アートママ (小さな母と大きな靴)
1997年 | 写真 | 74.5×60 | 作家蔵
3. アートママ オブジェ：ビッグシューズ
1997年 | アクリル絵具、ダンボール、紐、ガムテープ
右足：43×18×22 左足：41×17.5×20 | 作家蔵
4. 郵便受け箱とアートママ
2000年 | ファウンドオブジェ、鋼鉄箱、写真、ビデオ
82×79×7 | 作家蔵
5. ポロポロのダンボールボックスと母の生活の声
1999年 | ダンボール箱、写真、テープ
18×40×34 | 作家蔵
6. アートママ オブジェ：1999年の母の医療と
社会福祉
1999年 | ミクストメディア、ガラスケース
55×直径25 | 作家蔵
7. アートイベント：アートママ+息子
2008年9月24日 折元邸、川崎市、神奈川
2008年 | 写真 | 44×55 | 作家蔵
8. パフォーマンス：パン人間の息子+アルツハイ
マーの母 ギャラリー現、東京
1996年 | 写真 | 44×55 | 作家蔵
9. パフォーマンス：最初のパン人間
ケルン、ドイツ
1990年 | 写真 | 作家蔵
10. パフォーマンス：パン人間電車の旅
ケルンからボン、ドイツ
1992年 | 写真 | 作家蔵
11. パフォーマンス：西鉄福岡駅コンコースでの30
人のパン人間 ミュージアムシティ天神、福岡
1992年 | 写真 | 作家蔵

12. パフォーマンス：ニューヨークのホームレスと
パン人間 パワリーミッション奉仕活動、ルー
ズベルトパーク、ニューヨーク
1993年 | 写真 | 作家蔵
13. パフォーマンス：駅でのパン人間
ケント駅、ベルギー
1993年 | 写真 | 作家蔵
14. パフォーマンス：パン人間が警官と握手をする
国会議事堂前、ロンドン
1996年 | 写真 | 作家蔵
15. パフォーマンス：マーケットを歩くパン人間
ウィーン ナッシュマーケット、ウィーン、オース
トリア
2000年 | 写真 | 作家蔵
16. パン人間スライドショー
(折元立身パフォーマンス(パン人間 1990-
2016))
2017年 | 映像 | 作家蔵
17. オブジェ：時計人間
2023年 | 時計、段ボール、テープ | 62×43×16
作家蔵
18. パフォーマンス：時計人間
1991年 | 写真 | 72.6×102.8×3 | 作家蔵
19. 無情
2023年 | ファウンドオブジェ、紐、割りばし、
ガムテープ | 23×19.2×12 | 作家蔵
20. 無情 2
2023年 | ファウンドオブジェ、段ボール、接着剤
13×22×17 | 作家蔵
21. 行進
2023年 | ファウンドオブジェ、タオル、マッチ棒、
接着剤 | 25×110×50 | 作家蔵
22. ニューヨーク時代の作品
1970年代 | 油性塗料、木材 | 112×25×1.8
作家蔵
23. 昆虫 1
2023年 | ファウンドオブジェ(鉄箱)、マッチ棒、
枯れ葉、紙 | 7×22.5×32 | 作家蔵

24. 昆虫 2
2023年 | ファウンドオブジェ(鉄箱)、マッチ棒、
プラスチック、ビス | 9×38×28 | 作家蔵
 25. 鳥の巣
2023年 | かご、タオル、枯れ葉、水引、紐
16.3×26×12.2 | 作家蔵
 26. 2つの椅子
1976年 | 油性塗料、木材
左：19.8×8.9×8.9 右：19.8×8.9×8.9 | 作家蔵
 27. 恐竜 1
2023年 | 水彩絵具、段ボール箱、ファウンドオブジェ
(恐竜)、紙、木の枝 | 27.5×41×24 | 作家蔵
 28. 獅子舞
2023年 | 箱、ファウンドオブジェ(ひな人形)
17×21.5×15 | 作家蔵
 29. かご
2023年 | 箱、かご、新聞、広告チラシ、ビー玉
18×18×15.2 | 作家蔵
 30. 皿時計
1971年 | 皿時計、接着剤 | 30×30×8 | 作家蔵
 31. 皿時計
1971年 | 皿時計、接着剤 | 30×30×9 | 作家蔵
 32. 皿時計
1971年 | 皿時計、接着剤 | 29×29×11.5 | 作家蔵
 33. 映像：折元立身
2024年 | 映像 | 4分44秒
- ### 酒井美穂子 SAKAI Mihoko
34. 無題
2015-2023年 | 即席種
17.8×14.7×3(計1489個) | やまなみ工房蔵
 35. 酒井美穂子・本人
2015年 | 写真 | やまなみ工房蔵
 36. 酒井美穂子・本人
2015年 | 写真 | やまなみ工房蔵

37. 映像：酒井美穂子
2024年 | 映像 | 7分1秒

スウィング Swing

38. 無題
2008-2023年 | 写真 | スウィング蔵
39. 無題
2018年 | マネキン、衣装 | 184×47×20
スウィング蔵
40. ホノ戸昌幸(作)、吉村千奈(筆) 無題
2016年 | 墨、書道紙 | スウィング蔵
41. Ackey 朝を待つクチナシ
2021年6月1日火曜日 | パステル、紙 | 54×39
スウィング蔵
42. Ackey 空に咲くバラ
2021年5月27日木曜日 | パステル、紙 | 54×39
スウィング蔵
43. Ackey どっちが先に謝るか？
2020年2月19日水曜日 | パステル、紙 | 39×54
スウィング蔵
44. Ackey 走る猫
2015年12月8日火曜日 | パステル、紙 | 39×54
スウィング蔵
45. Ackey 子猫に会いたい
2020年2月14日金曜日 | パステル、紙 | 39×27
スウィング蔵
46. Ackey しっぽを回す猫
2020年2月13日水曜日 | パステル、紙 | 27×39
スウィング蔵
47. Ackey 舌で歯を抜く犬
2014年6月25日水曜日 | パステル、紙 | 39×27
スウィング蔵
48. Ackey 朝日を浴びる猫
2014年2月18日火曜日 | パステル、紙 | 27×39
スウィング蔵

49. Ackey 夕焼けとはんぺん
2021年11月17日水曜日 | パステル、紙 | 27×39
スウィング蔵
50. Ackey 腹が減ったチョコブラウニー
令和4年2022年8月19日金曜日 | パステル、紙
39×27 | スウィング蔵
51. Ackey 賞味期限切れのウイロウ
令和4年2022年8月16日(火) | パステル、紙
39×27 | スウィング蔵
52. Ackey 絹ごしみたいな木綿豆腐
令和4年2022年8月4日木曜日 | パステル、紙
27×39 | スウィング蔵
53. naco じゃれる狼
2015年12月25日(金) | オイルパステル、紙
54×39 | スウィング蔵
54. naco こどもと遊ぶ虎
2017年1月25日(火) | オイルパステル、紙
39×54 | スウィング蔵
55. naco たたずむ赤絨毯
2015年9月30日(水) | オイルパステル、紙
39×54 | スウィング蔵
56. naco 鏡を見る牛
2014年6月3日(火) | オイルパステル、紙
54×39 | スウィング蔵
57. naco 笛を吹くシロガオサキ
2015年11月4日(水) | オイルパステル、紙
54×39 | スウィング蔵
58. naco ダチョウの幸福
2015年11月11日(水) | オイルパステル、紙
54×39 | スウィング蔵
59. naco 緑色のカーテン
2015年10月16日(金) | オイルパステル、紙
54×39 | スウィング蔵
60. XL 曾祖父のカバン
2015年3月25日 | オイルパステル、色鉛筆、紙
54×39 | スウィング蔵
61. XL 双子が踊る
3月1日(日) | オイルパステル、色鉛筆、紙
54×39 | スウィング蔵

62. XL 象のお通じ
3月1日(日) | オイルパステル、紙
54×39 | スウィング蔵
63. XL 檻の中の哀しみ
2016年3月23日(水) | オイルパステル、紙
54×39 | スウィング蔵
64. XL 迷子のポクサー
2016年8月4日(木) | オイルパステル、ボールペン、紙
54×39 | スウィング蔵
65. XL 獲物を追うオオカミ
2016年2月19日(金) | オイルパステル、ボールペン、紙
39×54 | スウィング蔵
66. XL 勝者と敗者
2018年3月3日(土) | オイルパステル、ボールペン、紙
39×54 | スウィング蔵
67. XL 足の長い虎
10月22日(水) | オイルパステル、紙 | 39×54
スウィング蔵
68. 柴田祥子 夜の影
制作年不詳 | 油性ペン、ボールペン、紙 | 39×27
スウィング蔵
69. 柴田祥子 鳥Ⅰ
制作年不詳 | 油性ペン、ボールペン、紙 | 27×39
スウィング蔵
70. 柴田祥子 鳥Ⅱ
制作年不詳 | 油性ペン、ボールペン、紙 | 27×39
スウィング蔵
71. 柴田祥子 ティータイム
制作年不詳 | 油性ペン、ボールペン、紙 | 27×39
スウィング蔵
72. 柴田祥子 David Bowie III
制作年不詳 | 油性ペン、ボールペン、紙 | 39×27
スウィング蔵
73. 柴田祥子 David Bowie I
制作年不詳 | 油性ペン、ボールペン、紙 | 39×27
スウィング蔵
74. 柴田祥子 David Bowie II
制作年不詳 | 油性ペン、ボールペン、紙 | 39×27
スウィング蔵

75. 柴田祥子 喫茶店
2022年5月12日 | 油性ペン、ボールペン、紙
27×39 | スウィング蔵
76. 柴田祥子 coffee and cake
制作年不詳 | 油性ペン、ボールペン、紙
27×39 | スウィング蔵
77. 柴田祥子 Kate Bush
2017年7月 | 油性ペン、ボールペン、紙
27×39 | スウィング蔵
78. naco うさぎだったら
2014年 | 詩 | スウィング蔵
79. naco なんの花
2014年 | 詩 | スウィング蔵
80. naco 初恋
2016年 | 詩 | スウィング蔵
81. naco 大きな白い画用紙
2014年 | 詩 | スウィング蔵
82. Q Swing とは
2017年 | 詩 | スウィング蔵
83. Q あせること
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
84. Q カラオケ
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
85. Q こわい物
2012年 | 詩 | スウィング蔵
86. Q タダ
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
87. Q 仕事
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
88. Q 春夏秋冬
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
89. Q 障害者
2010年 | 詩 | スウィング蔵
90. かなえ あさひるよる
2014年 | 詩 | スウィング蔵

91. かなえ あついのがきらい
2014年 | 詩 | スウィング蔵
92. かなえ さんぽ
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
93. かなえ スウィング
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
94. かなえ たき火
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
95. キノティー・F・シャルル
ポンコツをなめるんじゃないよ！
2013年 | 詩 | スウィング蔵
96. キノティー・F・シャルル
ワタシの3つの願い
2015年 | 詩 | スウィング蔵
97. キノティー・F・シャルル
心の中は「ワタシ」
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
98. 吉村千奈 無題
2015年12月16日 | 詩 | スウィング蔵
99. 吉村千奈 無題
2015年12月16日 | 詩 | スウィング蔵
100. 吉村千奈 無題
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
101. 向井久夫 いきる
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
102. 向井久夫 かぜ
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
103. 向井久夫 さわやかなかぜ
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
104. 向井久夫 せいしんか
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
105. 向井久夫 そら
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
106. 向井久夫 ただ
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵

107. 向井久夫 ふりむかないで
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
108. 向井久夫 みえないもの
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
109. 向井久夫 どうぶつえん
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
110. 向井久夫 ねに、くる
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
111. 向井久夫 うんち
2016年 | 詩 | スウィング蔵
112. 向井久夫 おなら
2016年 | 詩 | スウィング蔵
113. 向井久夫 くも
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
114. 向井久夫 なんにも
2016年 | 詩 | スウィング蔵
115. 向井久夫 ひらめき
2016年 | 詩 | スウィング蔵
116. 向井久夫 ふるさと
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
117. 向井久夫 父母
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
118. 更田麻美 ゴミコロリ
2012年 | 詩 | スウィング蔵
119. 更田麻美 歯シーシー
2012年 | 詩 | スウィング蔵
120. 更田麻美 遅刻魔
2009年 | 詩 | スウィング蔵
121. 四宮大登 ふくろう(フクロウ)
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
122. 四宮大登 メリーゴーランド
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
123. 四宮大登 謎
2016年 | 詩 | スウィング蔵

124. 西谷文孝 せんぷうき
2015年 | 詩 | スウィング蔵
125. 西谷文孝 どうぶつえん
2008年 | 詩 | スウィング蔵
126. 西谷文孝 雨もり
2012年 | 詩 | スウィング蔵
127. 増田政男 はだか
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
128. 増田政男 はだか
2016年 | 詩 | スウィング蔵
129. 増田政男 ピーピーシャーシャー
2012年 | 詩 | スウィング蔵
130. 辻井美紗 食べこぼし
2013年 | 詩 | スウィング蔵
131. 辻井美紗 変な人
2012年 | 詩 | スウィング蔵
132. 辻井美紗 友達
制作年不詳 | 詩 | スウィング蔵
133. スウィング 映像：スウィング
2024年 | 映像 | 7分2秒
- 村上慧 MURAKAMI Satsohi
134. 熱の部屋
2024年 | 落ち葉、米ぬか、水、木材、キャスト、ドロー
イング | サイズ可変(発酵槽：180×362.8×140)
作家蔵
135. 映像：村上慧
2024年 | 映像 | 6分6秒

Foreword

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery is pleased to present Space in Symbiosis -How to live with “certainty”-.

This exhibition introduces the works and activities of artists who express themselves through inhabiting, residing, living, and doing things with others. Each artist has unique ways of expression, such as ORIMOTO Tatsumi, who has been performing to explore the relationship with his close family members, SAKAI Mihoko, who has love for certain food items, Swing, who scavenging trash in neighboring areas, poetry created from everyday events, MURAKAMI Satoshi, who attempts to reconsider modern homes and lifestyles. These expressions shake and question the boundary between life and art. When you encounter each uniqueness, you may feel surprised, confused, strange, or laugh and feel at ease. But for each of their works, there is something most intimate and certain in their symbiosis. They value the everyday interpersonal relationships that are hard to describe, and that cannot be contextualized into something bigger. Sometimes intimate, sometimes become strained, each confronts the other and the world with an invisible space.

In this exhibition, we hope that stepping into this world and being exposed to their “certainty” will allow you to ruminate on what “certainty” means for you as an individual. Enter the space of different Symbioses.

During the exhibition period, there will be performances and workshops by the exhibiting artists, talk events with guests, writing appreciation, and other events to take you one step further into the exhibition, which we hope you will enjoy along with the exhibition.

We would like to express our gratitude to the artists for allowing us to display their invaluable works. We also thank everyone who contributed their advice and cooperation toward the realization of this exhibition.

February 2024
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery,
Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

List of
Works



How to live with “certainty”

KAWAHARA Koya (Curator, Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery)

The term “symbiosis” in the exhibition title refers to a state in nature where “different entities live while mutually influencing each other.” Compared to the ideological aspects of “coexistence” that evoke harmony and solidarity, symbiosis seems to be a term that can be described through more tangible and accessible relationships between living beings, such as dwelling, living, and doing things together. “Space” (ma-ai) refers to the invisible spatial and psychological distance between living beings. However, everyone unconsciously maintains their own space with various things, securing an appropriate space or place for themselves to live. Space is not only friendly and intimate but also includes aspects of hostility and tension, constantly shifting and balancing as it changes. In this article, we will reflect on the activities and works of each artist, as well as the exhibitions held in this show, to explore the concept of Space in Symbiosis.

Murakami Satoshi, who created the experiential installation work 《Heat Room》 for this exhibition, has been continuously questioning the very nature of dwelling. Modern life relies on infrastructure such as electricity, gas, and water as the foundation of our everyday lives. However, many people live without knowing how these systems work. Murakami has created a heating device that viewers can physically experience, replacing these invisible forces with the forces of microorganisms. Viewers can simultaneously experience the different effects of various microorganisms, from slightly warm areas to hot spots exceeding 50 degrees Celsius, as well as cool areas. These microorganisms exist in numbers far greater than the number of fallen leaves we see every day or even the human population. The work can be seen as highlighting the existence of things that usually go unnoticed.

In 《Heat Room,》 when viewers place their hands or feet into the fermentation tank to experience the heat, it causes changes in the tank’s environment. The participant has an effect on the work and becomes a heat source themselves. This series of interactions may either promote or inhibit microbial activity, and the phenomena occurring here have unpredictable limits or leeway. This leeway holds the potential for endless expansion and seems to be an underlying element in Murakami’s previous works as well.

Murakami possesses a delicate sense of distance regarding how humans interact with and influence the environment and living things. From his student days studying architecture to his early works, he developed projects that involved the design, building, and production of spaces for people to gather, eat, and engage in expressive activities, as well as projects that emerged from the interactions between individuals in those spaces. Later, in his signature project “Living Migration,” he incorporated into his work the collaboration and conflicts between himself as a migrant and the local residents, as well as the social and personal struggles and mutual influences that arose. This attitude of blurring the boundaries between public and private, interior and exterior, can be said to be one of the alluring aspects of Murakami’s work. Even in his recent collaborations with nature, we can see the artist’s attitude of respecting what humans can never control and seeking ways to coexist that acknowledge change as inevitable.

Orimoto Tatsumi’s quintessential work titled “Bread Man” features photographs documenting public space performances from their beginnings in 1990 to 2000, along with presentation slides from 1990 to 2016. Orimoto shown with his head covered in bread evokes the image of a shaman performing a ritual or a grotesque creature. However, by using a familiar food item, it can also appear comical, creating a fusion of the eerie and the comical. This is evident in the nonsensical aspect of hiding the face, which signifies one’s individuality, and using a food item bread as an accessory, disrupting their respective meanings and functions. Bread, formed by the fermentation of microorganisms, is a food that represents collaboration between humans and microbes. However, in Orimoto’s hands, it seems to sever this long-standing context and attempt to construct a new relationship. In the encounter with the Bread Man and the communication arising from this unexpected meeting, there exists both tension and ease due to the strangeness and familiarity of the form.

In another of his signature works, “Art Mama,” Orimoto creates art from the intimate relationship between parent and child through collaborative performances with his mother who requires nursing care, and objects made from everyday items. The objects

centrally featured in this exhibition include practical items used by Orimoto’s mother such as medicine packaging, reading glasses, toothbrushes, dentures, and mirrors, as well as photographs documenting her everyday life and discarded items he collected like mailboxes and cardboard boxes. The combination of these materials may appear chaotic to others, yet it reveals a kind of order maintained by the intimacy between parent and child, almost like a sanctuary that viewers cannot touch. At the same time, a characteristic aspect is how the sense of déjà vu and nostalgia inherent in well-worn everyday items attracts viewers and connects to their own memories. Some might project their own experiences onto the work, relating to it personally. Orimoto has sublimated the complex reality and daily act of caregiving into his artwork. Furthermore, by exposing his own real life, he has shown that the reality of caregiving involves both affection and anger.

The essence of Orimoto’s work, seen in his performances and art objects, is deeply connected to his experiences in New York where he trained in the 1970s. His constant interest in uncontrollable elements like the flow of time and his perspective on the everyday, evident from his early works, can be said to embody the spirit of Fluxus that was alive in New York at the time. Orimoto learned from many predecessors the act of giving new value and purpose to natural objects, everyday items, discarded things, useless things—things on the verge of being forgotten.

His recent work 《Heartlessness》 features the head of a Japanese doll bound and wrapped tightly with disposable chopsticks and rope, evoking a restrained body. It’s an impulsive and sentimental object, completed with the speed of a drawing, expressing the sense of disconnect and dysfunction between body and mind due to his own aging. There are also dolls tied with rope or with their heads separated from their bodies, confined in birdcages or boxes, creating a series of objects that simultaneously possess a destructive dynamism and a gloomy stillness. These objects, created in rapid succession over a short period in 2023, seem to directly channel Orimoto’s own pent-up emotions from the COVID pandemic, when outings and interactions were restricted. At Orimoto’s core lies a transformative mindset of how to take action against negative circumstances and turn them into positives. This power, filled with love and humor, remains open to the world and serves as the driving force propelling him onto the stage of life as he grows older.

On the other side of the exhibition wall from Orimoto is Sakai Mihoko’s display where she collaborates with instant noodles. Sakai spends most of her day with packets of instant noodles. The time spent there seems to be a mixture of eternity and a fleeting moment, existing within Sakai’s unique sense of time. For Sakai, unlike for many people, instant noodles do not simply equal food. Between Sakai and the instant noodles, there’s an intimacy that goes beyond mere awareness or response. Through the interaction with this special item, Sakai has woven a unique world through her own subjective perception and awareness.

Sakai has spent a very long time with instant noodle packets, whether lying on her favorite sofa, sitting in formal Japanese style, standing on the floor, moving forward or backward, and with or without people around. In moments of occasional silence, the sound of the packet in Sakai’s hands evokes the sound of her breathing or heartbeat, echoing through the room with a mysterious presence.

Even Atelier Yamanami, which operates by creating artworks in collaboration with users and staff, had tried to encourage Sakai to try creative activities like drawing or knitting. However, Sakai stubbornly refused to let go of the instant noodle packets. One day, a visitor to Atelier Yamanami suggested, “Why don’t we save Sakai’s instant noodle packets?” This became the catalyst for storing the packets. Since then, through the thoughts, conflicts, and realizations of the staff, a vast amount of instant noodle packets have been saved. Atelier Yamanami is a welfare facility that has gained attention both domestically and internationally for its vibrant creative activities, centered on painting and ceramics. Even within this creative group, Sakai stands out with a particularly strong presence. This is not only because of her actions themselves, but also due to the wordless, boundary-transcending communication between Sakai and the instant noodles, and the collaborative relationship with family and facility staff who support her actions. One could say that a form of Japanese Art Brut exists at the intersection of various perspectives and challenges taken on by staff and family who have tried to give form to formless actions, as well as those of museums, galleries, and art professionals who have showcased Sakai’s actions and collection. The nature of a mutually respectful relationship, removing the barrier between supporters and the supported within the welfare facility, builds a trust relationship that cannot be established overnight. The collaboration born within this becomes evident, and Sakai’s actions directly appeal to the hearts of viewers as art. Sakai’s

actions have made it possible to boldly display commodities and food in exhibition spaces like museums and galleries, creating a point of contact where art and daily life are juxtaposed.

Swing is a facility characterized by its unique sense of humor that aims for the edge of what is acceptable, its approach to “work,” and its proactive communication with the outside world. At its foundation lies the sentiment embedded in the facility’s name “Swing.” There’s an attitude of confronting the question of how to live while welcoming all forms of change in individuals and organizations, whether moving forward or backward.

The pictures drawn by Swing members, while somewhat harsh and rebellious, often evoke familiarity and laughter. The works of artists Ackey and naco are characterized by contrasts where the depicted animals and food stand out against monochrome backgrounds, while the paintings of artists XL and Shibata Shoko feature bold color combinations and compositions. These depict people, animals, and rock stars, evoking an ambivalent worldview where the ancient past and the future coexist. Common to all of them is the choice of materials like oil pastels and glittery oil-based pens, and the varying intensity of application, directly reflecting the individuality and preferences of the artists. There’s a rawness to them that seems to bring back the time each artist spent engrossed in their work. The poetry created by members features concise expressions of trivial daily events in short phrases. From those that make you laugh spontaneously to those that instantly penetrate deep into your heart, we’ve selected 56 poems from among many. There are various ways of writing: some write in a diary style, while others spin words from workshops or discussions. Among them, Mukai Hisao’s poems have a gentle narration that balances innocence and experience toward loved ones, objects, and events, with a power that seems to strip the reader bare.

Looking at the historical record photos of the cleaning activity “GOMICORORI,” you notice changes not only in each member but also in the town’s landscape and the types of garbage collected. These are surely changes that can be discovered by consistently observing the same activity from a fixed point. GOMICORORI reminds one of the world of RPGs where you move through dungeons while collecting items. By introducing a touch of game-like elements into daily life, it might be possible to turn things people usually don’t want to do into something a bit pleasant, interesting, and fulfilling. Another characteristic of GOMICORORI is that it doesn’t require much verbal communication, whether among familiar people or strangers. There’s a form of communication based on seeing, feeling, and learning. Because there is no set correct answer, some people randomly collect items (garbage), while others gather their own precious items (garbage) at their own pace. By not overly focusing on pursuing a larger purpose, one can sense meaning imbued in each small occurrence in the process. At the same time, we must not forget that these small accumulations can be useful when confronting formidable challenges.

In this way, Swing’s activities actively engage people and society, based on the principle that “work” means having an impact on people and society. These activities are said to be Swing’s own way of questioning existing views on work and art. The “people” mentioned here also refers to the members themselves, and it seems as if they find “impact on oneself” in the activities mentioned above. Swing’s activities, with their comedic wit, jazz-like improvisation, and broad familiarity, suggest a form of creative practice that is refined daily through the repetition of small questions and answers, rather than pursuing fixed, grand solutions.

This exhibition introduced invisible communications and workings, activities and works arising from hard-to-verbalize relationships between individuals, and the unique ideas of artists. Perhaps we can discover in the attitudes of each artist a willingness to accept change, uncertainty, and strangeness. From the images of people jumping out into the streets or continuously holding instant noodles, we can sense the courage and unwavering spirit to face the immeasurable.

When we hear the word “certain,” we might imagine something fixed and immovable. However, it might be more accurate to say that what remains without being swept away, even in flexible, well-ventilated, fluid, and sometimes unstable situations, is truly certain. People (and indeed all living things) live in symbiosis while maintaining a certain amount of space from others. This is because relationships with others, and even ourselves, are uncertain and ever-changing, necessitating constant adjustment of this space. What we realize from the works of each artist and their long-sustained actions is that something certain emerges amidst the uncertain and unpredictable ebbs and flows of creative practice.

Artist’s Biographies

ORIMOTO Tatsumi

Born in Kawasaki City, Kanagawa Prefecture, in 1946. ORIMOTO Tatsumi is a contemporary artist who has been active on the front lines of the field for nearly 40 years.

His signature “Bread Man,” a performance art piece in which he wraps loaves of bread around his head and takes to the streets, has been performed more than 200 times in museums, galleries, and out in public in various locations around the world. The performance always produces surprise, bewilderment, or even laughter, and results in a variety of responses and interactions. His “Art-Mama” series has drawn considerable attention. In it, ORIMOTO uses performances to present his everyday experiences caring for his mother (ORIMOTO Odai), the life they live together, and their close relationship. He also utilizes photos, video, and physical objects to create a record of these ephemera. This exhibition showcases a portion of some of the best examples of these works. Through his art, ORIMOTO has looked at the rela-

tionships between people (and sometimes between people and animals) as well as the nature of communication with love, humor, and compassion. ORIMOTO himself avoids assigning meaning to his works, stating that they emerge spontaneously. The sense of déjà vu and the curiosity of the strange found in ORIMOTO’S art, however, agitate the lines between life and art; the invisible, latent boundaries of everyday life; and the realities that we would turn away from, creating lasting impressions in the viewer’s mind.

The objets d’art presented in this exhibition, his latest pieces, were created by combining innumerable materials and everyday items scattered throughout the rooms of ORIMOTO’S home-cum-studio. Together with the improvisational energy that emanates from his performances, ORIMOTO has breathed life back into seemingly useless and forgotten objects. These sculptures come off as vivid projections of the long career of an artist whose work has been an extension of his daily life.

SAKAI Mihoko

Born in Shiga Prefecture in 1979. Since 1996, SAKAI Mihoko has been a member of Atelier YAMANAMI, an art-oriented welfare facility in Shiga Prefecture.

For more than 28 years, no matter where she has gone or who she has been with, SAKAI has never parted with a package of Sapporo Ichiban Soi Sauce instant noodles even for a moment. She doesn’t eat them, however. Instead, she continuously rubs the package rhythmically, listening to the rustling sound of the plastic and quietly gazing at the faint reflections on its surface.

Each morning, SAKAI’S family hands her a new package of instant noodles before she heads off to Atelier YAMANAMI. The previous day’s package is kept by the facility staff, and each package is individually marked

with a sticky note with the date on it. Although the packages look the same at first glance, a closer look reveals that each is different in shape. These packages serve as a record of the daily life of SAKAI, a person of few words, and also as a medium for recollecting the irreplaceable memories SAKAI and the facility staff have created together.

This exhibition features a wall of more than 1,000 instant noodle packages. Observe a portion of a vast collection giving silent testament to an inconsequential, ephemeral act. The exhibit also includes video footage of SAKAI’S days spent rubbing packages of instant noodles as well as interviews with facility staff. SAKAI’S collection of instant noodle packages that she has rubbed continues to grow to this day.

Swing

Started in 2006, Swing is an art- and environment-oriented welfare facility in Kyoto where about 30 people with and without disabilities work.

The facility’s operations focus on artistic activities and it also engages in outward-facing communication projects ranging from holding exhibitions to publishing free newspapers and podcasting. This exhibition presents paintings and poems created as part of some of Swing’s main welfare activities, as well as the

facility’s GOMICORORI garbage cleanup events.

In the center of the venue, a number of poems written by members of Swing are gathered together and displayed as a giant poetry anthology created specially for this exhibition. As you flip through the large pages, let your imagination wander among the resulting world of poems interspersed with the daily events and memories of the members.

Swing’s activities and creative environment place

importance on a collaborative relationship between staff and members while respecting individual creativity. By facing each member honestly without being bound by set-in-stone rules, Swing fluidly adapts and evolves on a daily basis. The paintings and pictures covering the walls of the exhibition give a sense of the free use of color, shape, composition, and art styles that are a product of Swing's open and airy creative space.

In addition, at Swing's daily morning meeting, there is time for each member to talk casually about everyday

GOMICORORI

GOMICORORI garbage cleanup events have been conducted by welfare facility Swing on a monthly basis for 15 years since 2008.

Held primarily in the Kamigamo area in Kyoto where Swing is located, GOMICORORI events are conducted without fail whether the weather is hot or cold, and the 184th such event was celebrated this past February. The events have remained one of Swing's core activities, unrestricted by existing views of work and art, and are dedicated to the theme of adding more "bugs" to the everyday landscape. This exhibition features photographs documenting the history of GOMICORORI starting with the first event, as well as video footage from events conducted in Kyoto and Shibuya.

The blue-costumed heroes called the "City Cleanup Squadron GOMICORO-rangers" (commonly known

matters (what they ate yesterday, having a back tooth pulled, not wanting to go for a checkup, etc.), providing an informal space for them to share with each other. The confidence of Swing's members that the facility will be able to take anything they throw, from a straight pitch to the wildest curve ball, may be the result of the mental fortitude they have built through their artistic activities at the facility. The foundation that allows such great "swings" is rooted deep underground, invisible to the eye.

as the "GOMI Blue") began appearing with the 50th event to help create publicity for GOMICORORI. When they first appeared, they took on the role of symbolic "bugs," standing out quite distinctly from the surrounding everyday landscape. Today, however, as they go shopping at local convenience stores, are cheered on by children from nearby nursery and elementary schools, and are greeted by passersby, these "bugs" are becoming a part of that same everyday landscape. During GOMICORORI events, participants always remember to have fun and focus on the little joys as part of their everyday lives rather than on being rewarded or compensated for their efforts. Putting the spotlight on the communication that occurs as part of the process rather than on the goal, GOMICORORI takes a unique approach to rocking the boundaries, large and small, found throughout everyday urban life.

MURAKAMI Satoshi

Born in Tokyo in 1988. MURAKAMI Satoshi is a contemporary artist who has continually questioned existing ways of life and housing.

Starting in 2014, MURAKAMI began attracting a great deal of attention with his "Living Migration" project, in which he traveled around Japan and the world while carrying around and living in his own self-made Styrofoam house. An artist who explores patterns of living, MURAKAMI recently launched a new project called "MURAKAMI BENKYOU-DOU(learning environment)," which incorporates the development of spaces that are heated and cooled without using electricity, such as utilizing the heat generated by decomposing fallen leaves and the cooling effect provided by evaporation.

This exhibition features interactive works created by MURAKAMI during his residency prior to the exhibition. This new installation utilizes the heat emitted when microorganisms that grow on fallen leaves de-

compose organic matter.

The fallen leaves used (approximately 4,500 liters worth) came from Yoyogi Park, located to the north of the gallery. Experience the smell of fallen leaves and decaying soil, as well as the heat created through natural processes. Behind these are the actions of countless microorganisms invisible to the human eye. MURAKAMI anticipates that the viewer, as yet another heat source, will have some kind of effect on the workings of the microorganisms.

Once you take a moment to think about the things going on in all sorts of unknown and unnoticed places in the world, including your own body, you will notice how strange it is that the artificial environments that underpin human lifestyles are isolated from the natural environment. Through direct, real-world actions and tactile living experiences, MURAKAMI attempts to bring to light that which is so obvious it goes unnoticed.

[写真撮影]

TAMURA Can (1頁)

Narita Mai (1頁)

佐藤基 (13-20, 22-25, 28-44, 46-47, 49, 52-65頁)

Crashi Films (26-27頁)

前谷開 (50-51頁)

記載のない画像は、東京都渋谷公園通りギャラリーによる撮影

[写真提供]

アートママファウンデーション (1頁)

やまなみ工房 (1, 21頁)

[Photographer]

TAMURA Can (p.1)

Narita Mai (p.1)

SATO Motoi (pp.13-20, 22-25, 28-44, 46-47, p.49, pp.52-65)

Crashi Films (pp.26-27)

MAETANI Kai (pp.50-51)

All images without credit are taken by Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery.

[Courtesy]

ART-MAMA Foundation (p.1)

Atelier Yamanami (p.1, p.21)

東京都渋谷公園通りギャラリー

展覧会「共棲の間合い -『確かさ』と共に生きるには-」

[展覧会]

企画・運営：河原功也（東京都渋谷公園通りギャラリー）

広報物デザイン：植田正

広報物印刷：武蔵高速印刷株式会社

記録映像等動画撮影・編集：Crashi Films

広報：加藤志保（東京都渋谷公園通りギャラリー）

サポートスタッフ：南條円花、吉岡萌

[カタログ]

企画・執筆・編集：河原功也

翻訳：株式会社アイデア・インスティテュート

デザイン：植田正

印刷：株式会社山田写真製版所

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 東京都渋谷公園通りギャラリー

発行日：2024年10月

Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery

Exhibition: Space in Symbiosis -How to live with “certainty”-

[Exhibition]

Curator: KAWAHARA Koya

Publication Design: UEDA Tadashi

Publication Printing: Musashi Printing Co., Ltd

Video Shooting and Editing: Crashi Films

Press Officer: KATO Shiho

Support Staff: NANJO Madoka, YOSHIOKA Megumi

[Catalogue]

Planning, Texts, Editing: KAWAHARA Koya

Translation: IDEA INSTITUTE INC.

Design: UEDA Tadashi

Printed by: Yamada Photo Process Co., Ltd.

Published by: Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,

Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

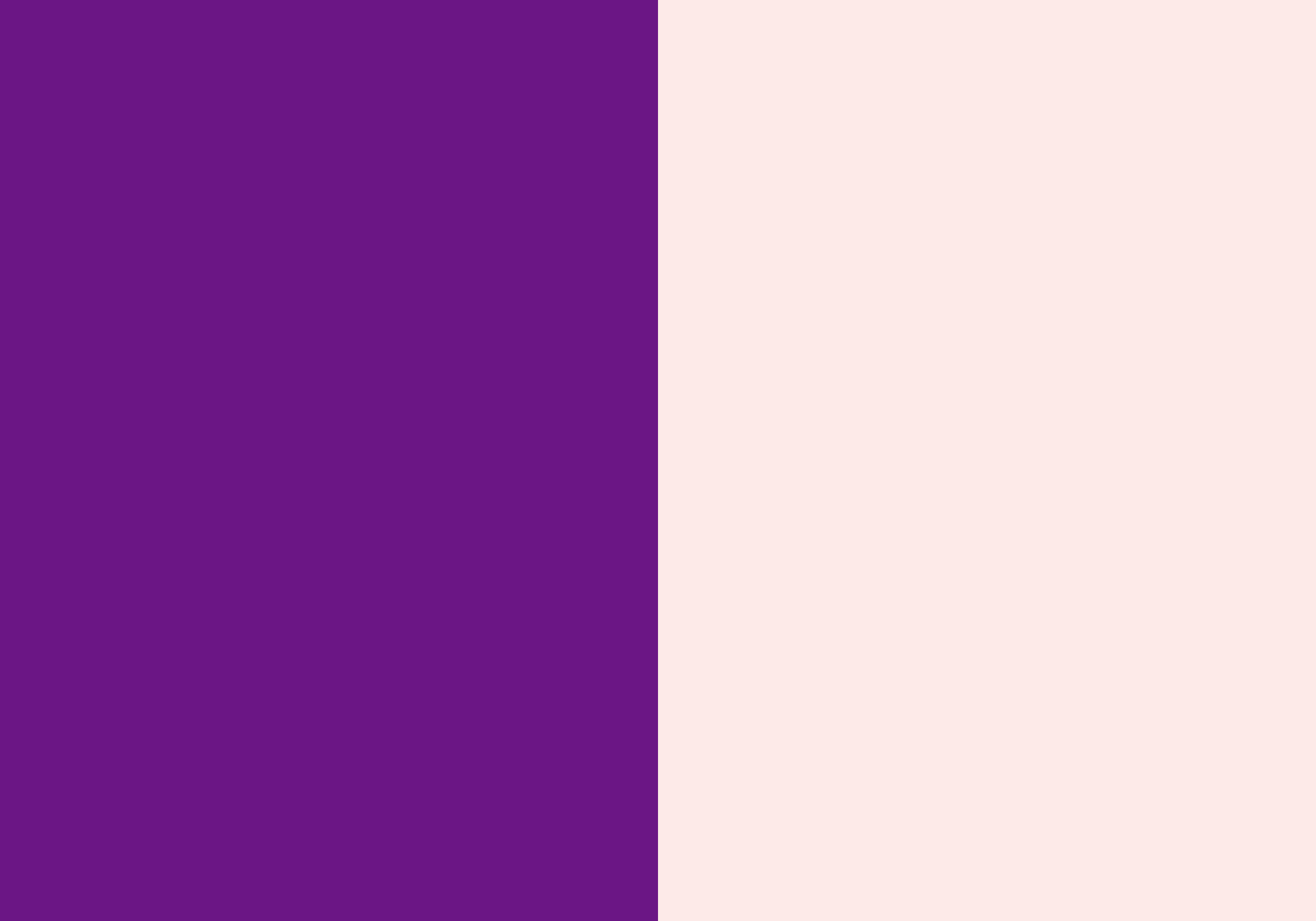
Publication Date: October, 2024

Artwork © The Artist

© 2024 Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery, Museum of Contemporary Art Tokyo,
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture



東京都渋谷公園通りギャラリー
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery





東京都渋谷公園通りギャラリー
Tokyo Shibuya Koen-dori Gallery